時の黄金を求めて
――ブルトンとプルースト

齊藤哲也

「失望は、探究または習得の基本的な契機である。」
（ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』）

失われた＝無駄にした時

アンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』（一九二四）が、記憶をテーマとした自伝であることは自明であるが、そのことはあまりにも自明すぎるのか、ほとんど指摘されることがない。まずは、すみやかに「自伝」の方から確認していこう。

この書は、だいたい次のような筋書きをもつひとりの男の物語であった。――つまり、書くことができない、そして書くことに信頼を置くことができなくなったひとりの男、すなわちブルトンが、まったく予想もしていなかったある出来事（「すなわちある晩のこと……」）に遭遇し、とつじょ思ってもみなかったような仕方で、書くことの意味を、そして生きることの意味をふたたび見出す。

じじつ、書物の前半で赤裸々に告白されるのは、「私」のいわば「失われた＝無駄にした時間」の体験談であった。

私はこういう馬鹿げた告白が好きである。あのころはキュビスムの疑似詩が根をおろそうとしていたのだが、それは

ピカソの頭脳から無防備なまま出てきたものにすぎず、また、私はどうだったかといえば、雨のように退屈な男としてとおっていた（いまもとおっているが）。そのうえ、詩的見地からして、じぶんはまちがった道をたどっているのではないか、と疑ってもいた。それでもなお、あれこれの定義や処方をぶつけて抒情に立ちむかったり〔……〕、広告における詩の応用をさぐるふりをしたり（世界はひとつの美しい書物によってではなく、地獄あるいは天国のための美しい宣伝文によって終末をとげるだろう、と私は主張していた）しながら、できるだけ賭け金をひかえるようにしていたのである（OC1, 324）。

生ぬるい倦怠感とともに、とりあえず生きられているにすぎない、このような失われた＝無駄にした時間の経験が『シュルレアリスム宣言』と題される自伝のいわばプロローグをなしている。ちなみに、この自伝の記述がフィクションではないことは、たとえば一九一九年四月に友人ルイ・アラゴンに宛てられた手紙の内容からも確認されて、そこでブルトンは当時の失望感を完全にあきらめきった風情でつぎのように語っている。「ぼくにとって詩や芸術は目的であることをやめて（広告の）手段となる。／広告は手段であることをやめて目的となる。／（芸術のための）芸術の死。士気喪失[1]。」マラルメやヴァレリーに憧れて詩の世界に足をふみいれた若者は、こうして書くことの意味を見失い「士気喪失」の暗闇におちこんでしまうのだ。それは「私」の才能のせいかもしれないし、「広告」に堕してしまった文学の現実のせいかもしれないが、いずれにせよ文学は「私」が進むべき道ではないことはどうやらあきらかなようだ。一九二三年四月、ブルトンは「もうなにも書かないだろう」と、まわりに宣言するまでにいたる[2]。

しかし、ならばどうして、このようなけだるい口調で失われた＝無駄にした時間をふりかえることからはじまった『シュルレアリスム宣言』と題される自伝は、あの「生はべつのところにある」という力強い言葉でフィナーレを迎えることができたのだろうか？

つまりこういうことだ。――書くことはもはやじぶんにいっさいの喜びをあたえるはずがない、と失望しきっていたひとりの男、ブルトンを、そんな失望からありえない仕方で救いだし、そして書くことの意味を、さらには生きることの意味をふたたび見出させるひとつのしるしが到来する――そのような驚異的なしるしの到来を、「私」がじっさいに身をもって生きた出来事として物語ろうとするのが『シュルレアリスム宣言』と題される自伝であり、また、この自伝のなかでブルトンは、このようなしるしこそを「シュルレアリスム」という一語で呼んでみせることにもなるのだが、あまり先を急ぎすぎるのは得策ではないだろう。

『シュルレアリスム宣言』は記憶をテーマとして書かれた自

伝であるとすでに述べたが、この書物が、失われた＝無駄にした時間を炸裂させるように、とつじょ到来した驚異的なしるしを語る「私」の物語であることが確認されたいま、ここからはこの書のテーマとなっている「記憶」の方を確認することにしよう。問題とされるのは、はたしていかなる記憶か。

決まりきった記憶

不思議なことにこれまで指摘されてこなかったが、『シュルレアリスム宣言』は一種の「記憶論」（あるいは「時間論」）として書かれているテクストなのである。「シュルレアリスム」といえば、そのかたわらに「夢」や「無意識」といった言葉があたかもそうするのが自然な振る舞いであるかのように並べられてきたが、この書が論じているもっとも重要なテーマは、なによりもまず、記憶にほかならない。

じっさい、この書をぱらぱらとめくっていくだけで「記憶」という言葉が頻出するさまがすぐに確認されるのだが、しかしあらかじめ述べておくと、この言葉はブルトンにおいて、すべて、例外なく否定的な意味合いで用いられることになる。たとえば、つぎのような「夢」が論じられる一節を読み直してみよう。

> ふつうの観察者にとって、目覚めているときの出来事と眠っているときの出来事とのあいだに極端な重要度、深刻度のちがいが見られることは、いつも私をおどろかすのにじゅうぶんだった。というのは、人間は、眠りをとめたとき、なによりもまずじぶんの記憶（メモワール）にもてあそばれるからであり、しかも通常の状態でのこの記憶は、夢の諸状況をかすかにしか思いおこさせず、夢から現勢的な一貫性をことごとくうばいさり、じぶんでは数時間まえに夢をすててきたと信じている場所から、その唯一の決定因を、つまりあのゆるぎない希望や気苦労を出発させてよろこぶからである（OC1, 317）。

おなじく別の箇所でも、記憶にたいする不信が苛立ちを隠せないといった風情でつぎのように綴られている。

> 夢がいとなまれている（いとなまれているとみなされる）かぎりでは、どこから見てもそれは連続しているし、まとまった組織体の形跡をとどめている。ただ記憶（メモワール）のみが、不当にも夢をばらばらに切りはなし、場面のつなぎなどは考慮のほかに、夢そのものよりもむしろ、いくつかの夢のシリーズを私たちに見せているのだ（*Ibid.*）。

さきほど私は『シュルレアリスム宣言』とはある種の「記憶論」（あるいは「時間論」）として書かれているテクストである

と断言したが、もしかすると、つぎのように首を傾げる読者もなかにはいるかもしれない。すなわち、いま確認したふたつの文章をみるかぎり、そこで中心的なテーマとなっていたのは「夢」の方であって、「記憶」はそれとの関連でとおりがかりに触れられているにすぎない二次的なテーマではないか、と。――しかしそうではないのである。要点をまとめるまえに、もうひとつだけブルトンの文章を引用しておこう。ここでは『シュルレアリスム宣言』ではなく、グループ誕生いぜんに「シュルレアリスム」という言葉が使用されることで有名な、一九二二年の「霊媒の登場」と題されるテクストを引用することにする。しかも、まさしく「シュルレアリスム」という一語が書きつけられる決定的に重要な場面を、いまこそあらためて読みかえしてみよう。

「シュルレアリスム」に話を戻すなら、私はこのところ、この領域に意識的な要素を侵入させ、それをはなはだ限定された人間的、文学的意志（ヴォロンテ）のもとに置いてしまうのは、それをますます稔りの少ない開発に委ねるに等しいと考えるようになっていた。私はそういうやり方にたいして完全に関心を失ってしまっていた。これと同じ考えから、私はじぶんの関心のすべてを夢のレシに向けようという気になり、似たような様式化を避けるために、これを速記によって得ようと思いついた。残念なのは、この新しい試みが記憶（メモワール）の助けを求めるということであった、記憶というものはまことに消えやすいし、概して信用のおけぬものなのである(3)。

記憶にたいする不信が、まえの二つの引用文に負けず劣らずあからさまに綴られている。――ここで二点の確認をしておきたい。

まず第一点目として、『シュルレアリスム宣言』をはじめとする一九二〇年代の文章でブルトンがくりかえし論じているのは、「記憶」という問題であること。さらに正確を期するなら「記憶の怪しさ」という問題であること。

つぎに第二点目として、記憶を論じたこれらすべての文章に「夢」という言葉が同時に書きつけられていたこと。――もちろんこれはたんなる偶然ではない。

周知のとおり『シュルレアリスム宣言』と題される書物においては、夢の問題が主題的に論じられている。「私は、夢と現実という、外見はいかにもあいいれない二つの状態が、一種の絶対的現実、こういってよければ一種の超現実のなかへと、いつか将来、解消されてゆくことを信じている」(OC1, 319)。だが、そうなると「シュルレアリスム」といえば「夢の世界」だ、というあのクリシェもまったく根拠を欠いているわけではない、ということになるだろうか。しかし、そもそも、なぜ夢が論じられなければならないのだろうか――まさしく問われるべきだったのは、これまで完全に看過されてきたこの問いにほかなら

ないのである。

すでに引用した三つの文章からも自然と了解されるように、ブルトンが問題にしている「夢」とは「記憶」ではないものを指し示すための言葉であることはあまりにも明白である。夢は記憶のいわば裏面をなし、あるいは記憶の彼方を指し示すものだからこそ、かくも執拗に言及されているのだ。すなわち「なぜ夢が論じられなければならないのか」といういま提出した問いにたいする答えはある意味で単純きわまりないもので、それは「記憶というものが怪しいから」という一言に尽きるものである。いいかえるなら、記憶が怪しいと思われるからこそ、夢に（も）関心をむけてみる、という論理がそこに成立しているのであって、その逆ではいささかもないのだ。

もしかりに、ここできわめて乱暴に「シュルレアリスムとは夢の世界だ」というクリシェにそのまま同意するふりをしながら、「夢」という言葉と「シュルレアリスム」という言葉をこころみにイコールで結んでみるなら、この「シュルレアリスム＝夢」が対立するのは、まずなによりもさきに、テクストの論理から考えて、「記憶」であると考えなければならないだろう。一言でいえば『シュルレアリスム宣言』が語っている「シュルレアリスム」とは、記憶ではない思考のあり方を思考すること以外のなにものでもないのである。ブルトンはほかのところで、つぎのような語り方をすることにもなるはずだ。「私の想像力がじぶんの殻にとじこもり、もはや私の記憶（メモワール）と一致するしかなくなってしまったとき、私はいさぎよく、人並みに、いくばくかの相対的な満足をえらびとるだろう。〔……〕だが、それまではちがう！[4]」（『シュルレアリスムと絵画』）

とつぜん戻ってきた思い出

ところでブルトンにおける「記憶」あるいは「記憶の怪しさ」という主題に関連して、ここでもうひとつ急いで指摘しておかなければならないことがある。『シュルレアリスム宣言』において「記憶」という言葉が例外なく否定的な意味合いで使用されていることはすでに確認済みだが、一見するところ奇妙なことに、それといわば近しい関係にあると思われる語彙、つまり「思い出」については、逆に肯定的な意味合いで使用されることになるのだ。これをどのように考えるか。

シュルレアリスムにのめりこむ精神は、昂揚とともに、じぶんの子供のころの最良の部分をふたたび生き直す。それはなにか精神にとって、いましも溺死しようとしているときに、じぶんの人生の乗り越えがたい部分のすべてを、またたくまに思いおこしてしまうひとの確信のようなものである。〔……〕子供のころやその他のあれこれの思い出（スーヴニール）からは、どこか買い占められていない感じ、したがって道をはずれているという感じがあふれてくるが、私はそれこそ

が世にもゆたかなものだと考えている（OC1, 340）。

この引用文の直後でブルトンは、『地獄の一季節』のランボーというよりは『見出された時』のプルーストを思わせる「真の人生」という言葉を唐突に書きつけることになるのだが、それはともかくとして、ブルトンにおいて「記憶」はいつも信頼の置けない怪しいものととらえられているのにたいして、いわばその記憶の牢獄から人間を救済する力能をそなえた、特別な「思い出」が肯定的に語られることになる。このブルトンが語る「思い出」に、以下では場合におうじて「想起（スーヴニール）」という訳語を当てることにしよう。じっさい記憶と想起とは、本性的に異なる人間の思考のあり方なのだが、それを確認するまえにいくつか問題を整理しておきたい。

すでに確認したとおり、『シュルレアリスム宣言』においては「記憶」にたいする「夢」という対立が存在する。しかし、この対立の背後にはさらに大きな対立が前提されており、それは「記憶」にたいする「想起（スーヴニール）」という対立にほかならない。そしてこの「記憶」／「想起」という対立を核として、それぞれの極に、いわば肯定的な価値をもつ語彙と否定的な価値をもつ語彙とが配分され、テクスト全体を織り上げていくことになるのだ。

まず「思い出（スーヴニール）」がもつ特別な力の方は、すでに確認したとおり「夢」や、さきほどの引用文にあったとおり「子供のころ」という言葉と結びつき、テクストのうえにいわばポジティヴな極のセリーをはりめぐらせていくことになる。それにたいして「記憶（メモワール）」の方は、「現実（レアリテ）」や「労働（トラヴァイユ）」といった言葉（「かれは働くことに同意したからであり……」）と結びつき、テクストのうえにいわばネガティヴな極のセリーをかたちづくることになる。これはどういうことか。なぜ「想起＝思い出」は、「夢」や「子供のころ」と結びつき、たいして「記憶」の方は、「現実」や「労働」と結びつくという、一見するところ不自然なカップリングが成立してしまうことになるのだろうか……。

すなわち、ブルトンのいうシュルレアリスムとは、一般的にそう考えられているように「夢か現実か」という二者択一を問題にしているわけではいささかもない、ということである。なぜなら前者の「夢」の方は、まずなによりも「記憶」に対立するものとみなされ、逆に「想起」となにがしかの関係があると考えられているからこそ肯定され、それにたいし後者の「現実」の方は、「想起」とはまるで無縁なものであり、あくまで「記憶」に縛りつけられたままのものであるからこそ否定されているのである。要するに『シュルレアリスム宣言』と題されるテクストを読み解くうえで、そこに前提されている「記憶」／「想起」という対立を念頭に置くことはきわめて重要なのである。ここで補助線として、ブルトン以外の書き手のテクストを参照しながら、問題点をさらに整理する努力をしてみよう。

「記憶」の怪しさにたいして特別な「想起」の力を信頼し、そしてこの想起の力を「夢」や「子供のころ」や、さらに驚くべ

きことに「いましも溺死しようとしている」ひとという例外的状況に結びつけてしまうブルトンの議論。このような議論は、あらためて確認されるまでもなく、たとえばフロイトの精神分析とはきわめて異質な問題系をめぐっている。あえて思想史的な系譜に位置づけようとするなら、それは、たとえば記憶をめぐるアンリ・ベルクソンの哲学ときわめて近しい関係にあるものだといえるだろう。たとえば、それ自体で存在する過去の問題を論じた『物質と記憶』の第三章で、この哲学者はつぎのような特別な「想起＝思い出」の場面を問題にしていた。

> 大部分の子供における自然発生的な記憶の並はずれた発達は、子供たちがまだ自分の記憶を自分の振る舞いと連帯させていなかったことにまさに起因する。子供たちは普段は目下の印象を辿っており、彼らにおいて行動が想起の指示に従わないのと同様に、逆に彼らの想起（スーヴニール）＝思い出も行動の必要性に制限されていない。
>
> 〔……〕われわれの過去は、現在の行動の必要性によって抑制されているため、ほとんどその全体が隠されたままであるのだとすれば、いわば夢の生活のなかに戻るためにわれわれが有効な行動に関心を持たないすべての場合に、われわれの過去は意識の識閾を飛び越える力を取り戻すだろう。自然のものであれ人工的なものであれ、睡眠はちょうどこの種の無関心を引き起こす〔……〕。ところで、いくつかの夢や夢遊病状態における記憶の「高揚」は、決して珍しくもない観察事実である。消滅させられたと思われていた数々の想起（スーヴニール）＝思い出がそのとき驚くほど正確に再び現れる。われわれは、完全に忘れられていた幼年時代の光景のあらゆる細部を再び体験し、学んだことさえもはや覚えていない言葉を話すのである。しかし、この点で、溺れた人や首を吊った人における突然の窒息において時に生じること以上に有益なものは何もない(5)。

「無関心」や「学びなおし」（「学んだことさえもはや覚えていない言語を話す」）といった、一九二〇年代のブルトンにおけるキーワードが山のように盛られたテクストであるが、とりあえずそのことは脇に置いておこう(6)。要するに『シュルレアリスム宣言』の著者が、記憶の妨害によって夢を思い出すことがむずかしいとくりかえし語るとき、そこで前提とされているのは、たとえば夢が意識によって「抑圧」を被るというフロイト的発想ではないのだ。そうではなく問題は、記憶というものの本性そのものにかかわっている。

つまり、ベルクソンがそう考えたように、人間の記憶は「行動」に、つまり「現在」に縛りつけられたままである、だからこそブルトンにおいても、それは信頼の置けない怪しいものだ、ととらえられているのである。逆にブルトンにおいて、な

ぜ「夢」や「子供のころ」が熱のこもった語調で賞賛されるのかといえば、それはもちろん現実逃避やノスタルジーではいささかもなく、それらが現在には縛られていないある特別な〈時間〉を噴出させるものだ、と考えられているからにほかならない。まただからこそ、ブルトンの語る「想起（スーヴニール）」は、「夢」や「子供のころ」のみならず、「いましも溺死しようとしている」ひとという例外的状況ともかくも自然に結びついてしまうのだ。――『シュルレアリスム宣言』が、ある種の「時間論」として書かれたテクストであるとは、このような意味においてである。

じっさいこの観点で『シュルレアリスム宣言』の名高い書き出しの一文は示唆的である。「生への、生のなかでもいちばん不確実な部分への、つまり、いうまでもなく現実的生活なるものへの信頼がこうじてゆくと、最後にはその信頼は失われてしまう。人間、この決定的な夢みるひとrêveur」（OC1, 311）。ここで語られている「夢みるひと」とは、端的にいって、「行動」すなわち「現在」の軛から解放されたひと、というベルクソン的な意味で理解されなければならない語彙だろう。「過去のなかで生きることの楽しさのために過去のなかに生きる人は、行動にほとんど適応しておらず、その人において、想起＝思い出（スーヴニール）は現在の状況の利益となることなく意識の光に照らされて浮かび上がる。それはもはや衝動的な人ではなく、夢みるひとrêveurである（7）。」要するに、ブルトンがかれの書物の冒頭で「現実的生活なるものへの信頼」と語っているものは、ベルクソン的ないい方をするならば、「まったく純粋な現在のなかで生きること」を指していると考えていい。つまり、その対極にある生き方とされるブルトンの「夢みるひと」とは、もっとも簡単にいうなら、「現在」ではない〈時間〉を生きる（生きてしまう）者の謂いなのだ。

ベルクソンの哲学を参照しながら、しかし、ここで議論したいのは影響関係ではない。もっといえば、ブルトンの議論がはたしてベルクソン的と形容できるものであるかどうかも、まったく二次的な関心にすぎないといえる。

ここで肝心なのは、たとえばベルクソンの哲学をかたわらに置いてみることで見出される、ブルトンのテクストのあらたな読みの可能性に尽きている。

これまで『シュルレアリスム宣言』は、奇妙なことに、文学の技法あるいは理論を論じた書物であるかのように読まれてきたが、しかし、この書で提起されていた問いは、単純にまったく「別」であり、ある意味でもっと「深い」ものではなかっただろうか。

もっとも単純にいえば、ブルトンが提起しようとしているのは〈書くことの倫理〉をめぐる問いにほかならない。ここまでの議論に照らして具体的にいうなら、『シュルレアリスム宣言』の著者にとっては、たんに子供や溺れたひとのように、ある特別な想起を「生活」において経験できればそれで十分というわけでも、あるいは哲学者ベルクソンのように、そのような想起

の存在を「知的」に知ればそれで満足というわけでもなかった。そうではなく、ブルトンがなんとか語りだそうと努力している問題とは、かりに記憶の牢獄を打ち破る特別な想起というものが存在するのだとして、ならばそのような驚異的といえる出来事を、今度はいかにして書くことに接続できるか、という問いなのである。〈書くこと〉――これを場合によっては「文学」の問いと呼んでもいいだろうし、あるいは、この言葉を嫌ったシュルレアリストたちの言葉にしたがうなら「ポエジー」の問いといいかえてもいい。

ところで、かなり唐突にこの名前を喚起することが許されるなら、おそらくマルセル・プルーストが考えぬいた問題も、このような〈書くことの倫理〉をめぐる問いではなかっただろうか。おそらくプルーストの小説に登場する「私」にとっても、たとえば不揃いな敷石につまずいて、ある種の啓示的な出来事を経験できればそれで十分というわけではなかったはずである。かれにとっても問題だったのは、そのとき遭遇した強烈な「想起」の力を、今度はいかにして書くことに、つまり「文学」の問いに接続できるか、という問題ではなかっただろうか。まただからこそプルーストにおいては、そういう問題に気がつくことすらできない文学はむなしいものとされ、はげしい語調で批判されることにもなるのではないだろうか。

ブルトンが『シュルレアリスム宣言』においてある種の文学を批判的に語ってみせるのも、プルーストとまったくおなじ問題意識においてであり、それをいわゆる「前衛的」な反抗の身振りといって片づけてしまう怠惰な批評は、問題の所在をとらえる努力もせずに、ただ空振りにおわっているといわざるをえない。

だが、いまのところ漠然と予感されているにすぎないこのような問題を具体的に確認するには、フロイトでもベルクソンでも、あるいはほかの哲学者でもなく、〈書くことの倫理〉を究極まで押し進めた作家マルセル・プルーストをいまこそこの場に召喚し、ブルトンのテクストとじっさいに突き合わせてみなければならないだろう。いわば異なる二つの対象の接近から、はたしていかなる閃光がほとばしることになろうか。

真理がはじまるのは

「記憶の怪しさ」というブルトン的主題を、プルーストもたしかに共有していたように思われる。本題に入るまえに、まずはそのことをきわめて大雑把に確認しておこう。

プルーストにおいても、記憶というものは否定的にとらえられている。かれの自伝的小説においても、この言葉は、たとえば「いわゆるスナップショット」という言葉と結びつけられたり（OC4, 446）、あるいは「決まりきった」という形容詞を添えられたり（OC4, 448）、さらには「知性」という言葉とセットにされたりしながら（OC4, 450）、ブルトンとおなじように

否定的な意味合いで用いられているからである。

ところでプルーストにおいて、記憶は信頼の置けない怪しいものととらえられているのにたいして、いわばその記憶の牢獄から人間を救済する力能をそなえた、特別な「思い出」が――ブルトンとまったくおなじように――肯定的に語られることになるのだ。奇妙な一致といわざるをえない。たとえば、つぎの『見出された時』からの引用文は、そのようなプルーストにおける「記憶」／「思い出」の対立がもっとも鮮明に描き出されている語りのひとつではないだろうか。

> けれども、現在と両立できない過去の一瞬を私のかたわらにおいたこのだまし絵は、長つづきしなかった。なるほど、意志的な記憶（メモワール）のもたらすスペクタクルなら長引かせることができるし、それは私たちにとって絵本をひもとく以上の力を必要とするものではない。私の記憶は、おそらくさまざまな感覚の違いを確認していた。けれども、記憶は同質の諸要素を結びつけることしかしなかったのだ。ところが今しがた頭に浮かんだ三つの思い出（スーヴニール）の場合は、もはや事情が異なり、そこでは私の自我についてますます自分の気に入るような観念を作るのではなく、かえって私は今そこにあるこの自我の現実性をほとんど疑うばかりだった（OC4, 452）。

このようにプルーストにおいては「記憶」という言葉は「意志的」という形容詞と結びつけられ、それが見させるのは「スペクタクル」にすぎないとされる。それにたいして「思い出＝想起」の方は無意志的なものだとされ、後に確認するように、それが見させるのは、スペクタクルならざる「イマージュ」あるいは「ヴィジオン」だと語られることになるだろう。ついでに、もうひとつ議論を先取りしておくなら、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』で問題にするのも、まさしくこの種の特別な「イマージュ」の存在となるはずである。プルーストにおいてもブルトンにおいても、ある特別な「想起」は、ある特異な「イマージュ」の到来と分かちがたく結びつくことになる。

だが、そのまえに、なぜプルーストにおいてもブルトンにおいても「記憶」は信頼の置けない怪しいものとされているのだろうか。記憶が「現在」に縛られているから、というブルトン的レスポンスについてはすでに確認済みである。しかもこれは、ほかでもなくタイトルに「時」を冠した小説の著者マルセル・プルーストにとってもけっして無縁な結論ではなかったはずだ。しかし、右に引用した文章の内容に注目しながら、この問題をまた違った角度から考察することも可能である。

というのも、プルーストによれば、記憶の不十分さ、それが「決まりきった」ものとならざるをえない本質的な理由とは、記憶というものが「同質の諸要素を結びつけることしか」できないからだ、ということになる。そうであるならば、逆に考え

て、プルーストにおける記憶にたいする想起の優位とは、後者に内在する（同質ならざる）異質の諸要素を結びつけてしまうその力能にこそ存している、と考えていいのではないか。ある特別な想起は、まったく無関係な二つのものを、とつじょありえない仕方でひとつに結びつけてしまう、というのだ。

じじつ、この「記憶」／「想起」という対立的図式から、かれの特異な「文体論」がじかに導き出されることにもなるだろう。

なるほど一つの描写のなかで、描かれる場所にあらわれる物を次々と果てしなく並べることはできる。しかし真理が始まるのは、作家が異なる二つの対象をとりあげてその関係を提示し――それは科学の世界における唯一の関係である因果律にも似た芸術の世界における関係である――その二つの対象を美しい文体の必然的な環のなかに閉じこめたときでしかないだろう。いやそればかりか、真理も人生と同様に、二つの感覚に共通の性質を比較し、この二つの感覚を時間の偶然性から守るために、これを互いに隠喩のなかで結びつけて、共通の本質をそこから引き出すときにしか始まらないだろう（OC4, 468）。

読まれるとおり、作家の「文体」が論じられている名高い一文であるが、しかし、ここでの議論はたんに美学的な問題に還元されるものではないはずだ。それどころか、「人生と同様に」という表現ひとつとってもあきらかなとおり、ここで議論されているのは、〈書くこと〉すなわち文学の問題が、生の問題といかに接続しうるか、という倫理的な問い以外のなにものでもないはずである。具体的にいうなら、ゲルマント家の中庭や図書室で「私」がじっさいに生きた特別な想起を、今度はいかにして書くことによって、創造するとはいわないまでも、救出する（「時間の偶然性から守る」）ことができるのか、という問いが問われているのである。

だが同時に「異なる二つの対象」の接近に焦点を当てているこのプルーストの文体論を、ほぼ同時代に書かれた、また他の作家の文体論と突き合わせてみる誘惑に抗うことはどうしてもむずかしいのではないか。すなわち、ブルトンの『シュルレアリスム宣言』に引用されたことで有名な、あのピエール・ルヴェルディによる詩論である。ルヴェルディはつぎのように書いていた。「イメージは精神の純粋な創造物である。／それは直喩から生まれることはできず、多かれ少なかれたがいにへだたった二つの現実の接近から生まれる。／接近する二つの現実の関係が遠く、しかも適切であればあるほど、イメージはいっそう強まり――いっそう感動の力と詩的現実性をもつようになるだろう」（Reverdy cité par Breton, OC1, 324）。

これらふたつの文体論にして隠喩論の奇妙な類似あるいは一致をいかに考えるべきか。この点については、プルースト研究

者の湯沢英彦氏が指摘しているように「二つの異なるものの関係を議論の焦点にすえている点だけに着目するならば、プルーストをルヴェルディのような前衛的発想に近づけても間違いではない」はずである(8)。だが、むしろ注目すべきは、一見するところ奇妙にも似かよってみえるプルーストとルヴェルディの隠喩論のあいだに存在する、看過しえないへだたりの方なのだ。なぜなら「明らかに違うのは〔……〕プルーストにおいては、「隠喩」というレトリックの必然性が実存的な水準の経験に裏打ちされている」のにたいして、「ルヴェルディの議論の場合、人生のなんらかの経験に参照を求める発想はない」からである。――この点は重要だ。

もっとも簡単に語るなら、プルーストにおいてもルヴェルディにおいても、二つの異なるものの関係に議論の焦点をすえる「関係性の美学」を確認できるが、しかし、一方でルヴェルディにおいては文学の技法として論じられているものが、他方でプルーストにおいては、技法化することなどできない、あるいは端からそうすることなど問題にならない、人生の経験の問題として論じられている、そしてその点にこそ、ほぼ同時代に書かれたこれらふたつの文体論にして隠喩論をへだてる決定的な差異が存在する、ということになるだろう。

ところで、すでに述べたことだが、『南北』といういわばマイナーな雑誌に発表されたこのルヴェルディの詩論を一躍有名にしたのは、ほかでもなくブルトンの『シュルレアリスム宣言』であった。ならば、いま確認したプルーストとルヴェルディとのあいだに確認される共通点ならびに差異をシフトさせて、それをそのままプルーストとブルトンとの共通点ならびに差異であると結論することは可能だろうか。いいかえるなら「前衛的発想」の持ち主であるルヴェルディやブルトンにあくまでも不在なのは、プルーストが考えぬいたような「人生の問い」(湯沢英彦)であると結論することは可能だろうか。

ブルトン自身に聞いてみよう。結論からいうなら答えはノンである。なぜならかれは、先に引用した「いましも溺死しようとしている」ひとの特別な想起を問題にする直前の部分でルヴェルディの名前を挙げながら、つぎのような注釈を加えていたからである。

> シュルレアリスムのイマージュについては、あの阿片によるイマージュとおなじようなことがいえる。つまり、もはや人間のほうからよびおこされるものではない。〔……〕ここでかりに、私のように、ルヴェルディの定義で満足しておくとしても、彼のいわゆる「二つの異なる現実」を、意志的(ヴォロンテールマン)に接近させることができるとは思われない。接近はおこなわれることもあるし、おこなわれないこともあるというだけのことで、それがすべてである(OC1, 337)。

このようにブルトンは「二つの異なる現実」の接近を、詩を書

くための技法として涼しい顔で語ってみせるルヴェルディにたいして、なかば興奮ぎみに真っ向から異を唱えている。というのも、二つの異なるものの接近、すなわちプルースト的ないい方をするならば「隠喩」の到来は、ブルトンにおいても主体的なはたらきかけがいっさい無効となるような、暴力的な出来事ととらえられているからにほかならない。

ここでブルトンは、異なる二つの現実を「意志的に接近させることができるとは思われない」と消極的に語っているが、むしろそれは、あまりにも容易すぎる解決だからこそ、そうなのだと考えるべきだろう。なぜなら、二つの現実を「意志的に」接近させるには、たんに「記憶」に頼りさえすればいいからである。しかし、そうして接近させられた二つのものは、多かれ少なかれ「同質なもの」でしかないはずだ。そこには閃光はほとばしらない。したがって、このような安易な解決の誘惑に抗いながら、ここでブルトンが問題にしようとしているのは、プルーストがそう語っていたように、それとは「もはや事情が異な」る出来事なのだ、と考えなければならないだろう。――すなわち、この引用文の数行あとですぐさまあきらかにされるように、「私」にはあくまで制御できない、（記憶ならざる）「想起」の力を、今度はいかにして書くことに接続することができるのか、という問いがここで問われようとしているのである。〈出来事〉と〈書くこと〉をめぐる困難な問いをまえにしたプルーストとブルトンとの問題機制のあいだに、本質的な差異は存在しないと断言してもいい。しかしこの点については、またあとであらためて検討されることになるだろう。

だがそうなると、それぞれの仕方でそれぞれの「関係性の詩学」を論じている二十世紀初頭の作家、プルースト、ルヴェルディ、ブルトンのあいだに、もし一本の切断線を引くことができるとすれば、それは「後衛」プルーストにたいする「前衛」ルヴェルディ＝ブルトンという図式ではなく、「前衛」ルヴェルディにたいする（「前衛」でも「後衛」でもない）プルースト＝ブルトンという図式が私たちのまえに浮上することにならないか。じじつプルーストは、ブルトンとおなじような語り口で「私が定着させたいと思っているような印象は、じかにこれを享受しようとしても生み出すことのできないもので、直接ふれると消えてゆくほかはない」とも語っている（OC4, 456）。このプルーストの言葉を、いま確認したブルトンの言葉に接続するなら、プルーストがかれの本のなかで「私の定着させたいと思っているような印象」と語っていたものは、この私ブルトンにとっても「もはや人間のほうからよびおこされるものではない」と思われる、そんな対話が成立することにならないか。

『シュルレアリスム宣言』において議論されている、いわゆる「関係性の詩学」は、ルヴェルディ的というより、まさにプルースト的と呼ぶべき文体論にして隠喩論なのだ。つまりブルトンが議論の焦点にすえているのは、書きうるものの美学ではなく、〈書くこと〉――場合によっては、書きえないものを

〈書くこと〉――そのものにまつわる倫理にほかならない。じぶんには縁遠い社交界を舞台とした小説をのこした作家であるが、それでも「人間プルーストにたいして強い魅力を感じていた」という、ブルトンの晩年のインタヴューの言葉は、まさしく文字どおりに受けとめられるべきものだろう(9)。しかも「作品」ではなく「人間」の魅力という語り方は、『ナジャ』におけるユイスマンスやユゴーへの言及ぶりからもあきらかなように、ブルトンにとっては最大級のオマージュの捧げ方なのである。「どれだけかれに感謝していいかわからない。というのも、かれは最悪の苦境にあってさえ、その苦境の外でじぶんにかかわってくるすべてのことを、じぶんの心をうばうかぎりのことを、ひきおこす結果などにはかまわず伝えてくれているし、ありあまる詩人たちのようにそんな苦境を愚かしく「歌う」ことをせずに、じぶんがいまも生きてあるのはなぜか、だれのためにともおぼつかぬままに語る者であるのはなぜかということの、すこしも意識されていない些細な理由までも、辛坊づよく、こっそりと、数えあげてくれたのだから!(10)」

確信にも似た喜び

文学の理論や技法など、もうどうでもいいと呟かせてしまう、ある啓示的な出来事。ブルトンやプルーストの「私」が、あるとき思ってもみなかったような仕方で遭遇してしまったのは、主体としてのかれらをはげしく揺さぶり、その存在をとつじょ胡散臭いものにしてしまうこの種の特異な出来事であった。そしてこの出来事との遭遇こそが、かれらを〈書くこと〉に――すなわちプルーストの言葉でいえば「文学」に、そしてブルトンの言葉でいえば「ポエジー」に――むかわせる強制力としてはたらく。かれらがともに問題としているのは、たんなる「きっかけ」ではなく、まさしく「強制力」と呼ばれるにふさわしい、暴力的な出来事であろう。なぜなら、そのとき「私」は「書く」主体というよりも、むしろなにかによって「書かされる」存在になってしまっているはずだからである。ある特異な出来事の出来によって「私」は思考することを強いられ、書かされてしまう。――プルーストやブルトンが、「記憶」や「知性」を頼りにする芸術はどこまでいってもむなしい行為だ、と口をそろえて断言してみせるのはそのためである。

プルーストやブルトンに〈書くこと〉を強いた強制力としての出来事は、しかし、当然かれらが「書きうる」対象とはなってくれない。出来事はかれらに〈書くこと〉を強いる力として出来するが、しかし、かれら(人間?)によって「書かれうる」対象ではないからである。そのような意味で、かれらがなんとか語り出そうと努力している出来事は、「人生の経験」と呼ばれるものとは明確に区別されなければならないだろう。「私」の存在を揺るがした力としての出来事を、そのまま掌握し直すことなどできないし、いわんや、そこらに転がっている事物や、それらをまえにしたときに抱かれた「私」の心理のように描写

することなどできないが、しかし少なくとも、それが「私」におよぼした効果ならば、なんとかして語り出すことができるかもしれない。――プルーストやブルトンの「くねくねと蛇行する文章」（OC1, 331）を動かしているのは、このような〈出来事〉と〈書くこと〉をめぐるきわめて困難にみちた問いであると考えていい。

本稿のはじめで確認したように、『シュルレアリスム宣言』と題される書物は、著者ブルトンの失われた＝無駄にした時間、その人生の経験を跡づけることからはじまる自伝であった。ところが、じぶんの文学的才能の存在について、また文学そのものの現実について悲観的な考えを反芻しながら「ある晩のこと」眠りにつこうとしていた「私」に、とつじょ「窓ガラスをたたくような」知らせが訪れる。百年のあいだ探しても見つからないだろうと思われるような窓が不意にひらいてしまったかのようなのだ。すなわちこの瞬間、未来にかんするいっさいの不安、それまで「私」を悩ませていたいっさいの知的な疑惑は、まるで魔法にかかったようにすっかり消えてなくなってしまう。

私はかなりめずらしい型のイマージュを相手にしているのだとさとり、それにたいしてこうして信頼を寄せたとたん、さらにそのあとをうけて、次からつぎへと、なかなかとぎれることのない一連の文句がつづいてきた。それらも、ほとんどまえのものにおとらず私をおどろかせ、なにか無償のものという印象のもとに私をおきざりにしたので、私はそれまでじぶんにたいしてふるっていた支配力などはむなしいものに思われ、そして私はもはや、じぶんのなかでおこなわれている際限のない争いに終止符をうつことだけしか考えなくなった（OC1, 325）。

ある特異な「イマージュ」が不意に到来すると同時に、それまで抱えていた文学への失望どころか、そんな失望を抱いていた「じぶん」のこと自体が、もうどうでもよくなってしまう。しかも、ブルトンを失望から引き出して〈書くこと〉への信頼を返してくれたこのしるしは、その数をふやしたがっているかのように「次からつぎへと」押し寄せてくる、というのだ。あとはこれらのしるしに導かれるがままになればいい。さあ、お前にその力があるのだったら、通りがかりに私をつかまえてごらんと、このしるしは語りかけてくる……。しかし、ここで注目すべきは、イマージュの内容というより、このイマージュが「私」におよぼした効果の方であろう。というのも、ここでブルトンがなんとか語り出そうと苦労しているのは、私の生活を私にとって豊かにしてくれた人生の経験などではいささかもなく、逆に、私の生活の「私の」を急に胡散臭いものにし、「私にとって」という主観など、もうどうでもよいものにしてしまう、暴力的でありかつ啓示的な出来事であったからである。

ところで、プルーストの「私」に到来したのも、ブルトンの

それとまったくおなじ効果をもたらす暴力的な出来事であった。すでに確認した「記憶」と「想起」との本性的な違いを問題にする一文で、プルーストもつぎのように書いていたからである。煩を厭わず、いま一度引用することにしよう。

> ところが今しがた頭に浮かんだ三つの思い出の場合は、もはや事情が異なり、そこでは私の自我（モア）についてますますじぶんの気に入るような観念を作るのではなく、かえって私は今そこにあるこのじぶん（モア）の現実性をほとんど疑うばかりだった。

プルーストとブルトンが、それぞれ遭遇した特異な出来事は、おなじではなく、まったく無関係なふたつの出来事であるが、しかしこれらの特異な出来事は、まさしくほかに置き換えられないその特異性によって激しく共振しあっている。プルーストが語る「じぶん（モア）」の「今そこにある現実性（レアリテ）」からとつじょ解放された人間――ブルトンが『シュルレアリスム宣言』のなかで語る「超現実性（レアリテ）」とは、まさしくこのようなプルースト的な意味における、人間の時間の秩序からの解放であると理解されなければならぬわけが、この点についてはまた本稿の最後であらためて確認することにしたい。逆にいえば、プルーストの「私」が垣間見た「見出された時」とは、まさしくブルトン的な意味におけるシュルレアリスムのヴィジオンであるといってもいささかも過言ではないわけだが、そう結論するまえに、残された確認事項がまだいくつかあるだろう。

もしかすると、つぎのような反論が寄せられるかもしれない。すなわち、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』で問題にしているのは、かつて「私」が経験したことなどない特殊なイマージュ（「かなりめずらしい型のイマージュ」）の到来であり、一方プルーストが『見出された時』で問題にしているのは、かつて「私」がたしかに経験したことのある過去（コンブレーやヴェネツィア）のよみがえりである、そしてこの点にこそ、新奇なイマージュの量産をつうじて「未視（ジャメ）のもの（ヴュ）」を追求していった「前衛作家」と、じぶんの過去の経験の真実を理解する努力をつうじて「既視（デジャ）のもの（ヴュ）」を救い出そうとした「後衛作家」との明確な差異が存在するのではないか、と。――しかし、このような違いはたんに見かけ上のものであって、本質的な問題ではいさかもない、と躊躇わずに断言することができる。

たしかに、ついさきほど引用した文章でプルーストは、ゲルマント家の中庭や図書室でかれの脳裡に浮上した特殊なイマージュを「三つの思い出」という言葉で語っていた。しかし思い出そう、プルーストがここで問題にしている「思い出＝想起」は、たとえば「旅行の思い出」や「学生時代の思い出」といわれるときのような一般的な意味を大掛かりに逸脱する、ある特異な出来事を指し示すための言葉であった。じじつ、おなじ作家は、おなじ作品のなかで、問題の「思い出＝想起」を、ブルト

ンとまったくおなじ語彙をつかって「喚起されたイマージュ」であるとか（OC4, 445）、あるいは「目のくらくらするような、しかし判然としないヴィジオン」であるとか（OC4, 446）、さらには、ブルトンの文章からの引用だといわれてもまったく違和感のないような言葉づかいで「人がいよいよ眠りこもうとする瞬間」、不意に到来した「言うに言われぬヴィジオン」といった表現で何度もいいかえながら（OC4, 454）、この「思い出＝想起」の出来事としての特異性をなんとか語り出そうと努力していたことは周知のとおりである。これをブルトンの表現にならって、思考における「自動的なもの（オートマティスム）」の暴力的な介入、といいかえることすらできるだろう。いずれにせよプルーストの「私」が不意に遭遇したのは、かれがかつて経験したコンブレーでもヴェネツィアでもなく、絶対的にあたらしいかたちとなった〈時間〉のイマージュなのだ、と考えなければならない。どういうことか。

ある特殊な「想起＝思い出」の浮上と切り離すことのできない出来事としての「イマージュ」あるいは「ヴィジオン」。それにたいしてプルーストにおいては「意識的な記憶」がもたらすものは、すでに確認したように、たんなる「スペクタクル」にすぎないとされていた。スペクタクルは知覚可能な対象であり、したがって、その気になれば描写することも不可能ではない人生の経験に属している。それにたいしてプルーストが『見出された時』で語り出そうとしているイマージュやヴィジオンは、「書きうる」対象とはなりえない、あるいは事物や心理のように描写することなど端から問題とならない、純然たる出来事に属している。「出来事」とはいっても、だからそれは、派手な見世物や、人目をひくアクシデントの類とはまったく無関係なもの、さらにいえば、その対極にあるものと理解されなければならない。それどころか、思い出そう、プルースト的出来事とは、主体にまなざす時間などいっさいあたえてくれないものであった。じじつ、それは、ほかでもなく異常なまでに短く、「長つづきしない」ことによってこそ特徴づけられるものであるとされていた。「私の存在には、ふだんは絶対にとらえられないものを獲得し、それだけを切り離して固定することが――閃光のようにほんのちょっとのあいだにすぎないが――可能になったのだ。すなわち少しばかりの純粋状態の時間を」（OC4, 451、強調引用者）。

奇妙な一致と思われるかもしれないが、ブルトンにおいても、かれを不意に襲撃した特異なイマージュは、プルーストとおなじように「閃光」という言葉でしか語りえないものとされるだろう。「異なる二つの現実」を「意志的」には接近させることはできないと断言したうえで、ブルトンはつぎのようにつづけていた。

> 二つの項のいわば偶然の接近から、ある特別な光、イマージュの光がほとばしったのであり、私たちは、これにたい

してかぎりなく敏感なところを見せている。イメージの価値は、得られた閃光の美しさにかかっている〔……〕。ところで、私の思うに、これほどかけはなれた二つの現実の接近をあらかじめ用意するというのは、人間の権能に属することではない。連想の原理も、私たちの見るかぎりでは、その接近とあいいれないものだ（OC1, 337-338、「イマージュの光」以外の強調は引用者）。

なぜこのような「イマージュの光」がほとばしるのか、その原因はわからないし、またどのようにしたらこのような「特別な光」をほとばしらせることができるのか、そのメカニズムについても皆目見当がつかないが、しかしそれはじじつ「ほとばしった」のだ、と過去完了形で綴るブルトンの言葉からは、この種の出来事を身をもって生きてしまった人間にしか語りえない、いわば凄みが伝わってくる。いずれにせよ「人間の権能に属することではない」出来事を論じているこの書物が、どうしてこれまで文学の技法を論じた理論書であるかのように評されてきたのか、私としては完全に理解に苦しむところであるが、それはとりあえずおいておくとしても、なぜ、そもそもブルトンにおいてもプルーストにおいても、「ある特別な光」をともなうとされる「イマージュ」の到来は、「閃光」という言葉でしか語りえないものとされるのだろうか。――なぜなら、かれらがおなじく「閃光」という言葉を用いながらなんとか語り出そうとしているのは、ある特別な〈時間〉の噴出だからである。つまり「一」と数えることすらできない、さらにいえば、いかに精巧なストップウォッチをもってしてもけっして測定することなどできない、いわば「時間の外」にあるような特異な〈時間〉。すなわち、ブルトンやプルーストがそれぞれの自伝のなかで「イマージュ」と呼んでいるものは、ある特別な〈時間〉の噴出にかかわる出来事なのである。さらにいいかえるなら、かれらが問題にしているイマージュとは、詩についていわれるような「文彩」でも、絵画についていわれるような「かたち」でもない、ということだ。そうではなく、イマージュと時間には絶対的な同一性がある――それがブルーストならびにブルトンがそれぞれの仕方で見出した、真に独創的な発想であろう。何度でもくりかえそう、『シュルレアリスム宣言』とはある種の「時間論」として書かれている文章なのだ。

一方プルーストの「私」は、ブルトンとおなじように「喚起されたイマージュ」の「くらくらする光の印象」になかば浸りながら、つぎのように自問していた。

でも、なぜコンブレーとヴェネツィアのイマージュは、それぞれの瞬間に一つの喜びを私に与えたのか、確信にも似た喜び、そして他の証拠も何もないのに、それだけで死をどうでもよいものにしてしまうような喜びを、どうして私に与えたのであろうか（OC4, 446）。

この問いこそが決定的に重要であろう。すなわち、プルーストの「私」を「喜び」で満たしたのは、かつて経験し知覚したコンブレーやヴェネツィアのよみがえりではない、ということだ。この喜びの原因が、過去の知覚にあるとはどうしても考えられないからである。そうではなく、あるとき不意に到来した特異なイマージュ＝出来事によって、過去と現在は継起的に流れる時間の秩序を大掛かりに逸脱し、ありえない仕方で――「通常」の時間感覚においては不可能と思われるような仕方で――共存してしまう。また、それによって「私」は、とつじょ「時間の秩序から解放」され、不意に「超時間的な時間」を垣間見てしまうことになるのである。だからこそ、プルーストの「私」は「それだけで死をどうでもよいものにしてしまうような喜び」を味わうことになるのではないか。

ここで、すでに予告しておいた結論を述べるとりあえずの準備が整ったようだ。すなわち、迷わずこう断言したいと思う。――ブルトンが『シュルレアリスム宣言』で語ろうと努力していたのも、まさにこの「喜び」にほかならないのだ、と。

というのも、ブルトンがこの書のなかで「シュルレアリスム」という一語で呼んでみせたものは、ほかでもなく、このような特別な〈時間〉が噴出する（プルースト的な）出来事であったからである。じじつ、この書のなかのもっとも名高い一文は、いま確認したような意味においてしか理解できないものだろう。

> 夢と現実という、見かけではいかにもあいいれないこれらの二つの状態が、一種の絶対的な現実、こういってよければ一種の超現実のなかへと、いつか将来、解消されてゆくことを私は信じている。それを掌握することこそが私のめざすところだ。そこまで行きつけないのはたしかだとわかってはいても、私はじぶんの死などまったくどうでもよくなってしまったから、それをわがものにする喜びをいささか推算しないではいられない（OC1, 319）。

このブルトンの言葉に、挑発的な意図はいささかも含まれていないと思われる。文字どおり受けとるべきだろう。周知のとおり、この五年後に出版される『シュルレアリスム第二宣言』（一九二九）においては、「夢と現実」のみならず、「生と死」あるいは「過去と未来」とが対立することをやめる地点という語り方がされるわけだが、いうまでもなく、ここでブルトンが問題にしているのは、対立する二項をぶつけて第三の道を探るという、いわゆる弁証法的な思考ではいささかもないのだ。そうではなく、『シュルレアリスム宣言』の「私」が「シュルレアリスム」の名のもとに「宣言」しているのは、「じぶんの死などまったくどうでもよくなって」しまう「一種の絶対的な現実」の探究、すなわちプルーストがかれなりの言葉で「見出された時」と呼んでいた〈時間〉の本質を、これからも「見出すべき」もの

として探究しつづけていくことにほかならないのである。やがてブルトンの墓碑銘ともされることになるつぎの名高い一文は、まさしくこのような意味で理解されなければならない。すなわちブルトンいわく「私は時の黄金をさがしている(11)」――この燦然と輝く時間＝イメージこそが、シュルレアリスムと呼ばれるものなのだ。

シュルレアリスム宣言、あるいは、見出された時をこれからも求めて。あるいは、まさにそれこそが「シュルレアリスム革命」と呼ばれるものにほかならないだろう。また、そう結論することがもし正当であるとすれば、おなじくプルーストについても、しばしば語られてきたようないわゆる「ブルジョワ作家」であるどころか、まさに真の、言葉の強い意味における〈革命〉の作家であったといわなければならない。

註

＊以下のテクストから引用する場合には、OCという略号とともに、巻号とページ数のみを記し、本文中に（　　）で挿入した。たとえばアンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言』の二ページ目から引用する場合は（OC1, 2）となる。

André Breton, *Manifeste du surréalisme*, repris dans *Œuvres complètes*, tome I, Gallimard, 1988 (réf. abrégée en OC1), pp. 309-346.

Marcel Proust, *Le Temps retrouvé*, repris dans *Œuvres complètes*, tome IV, Gallimard, 1989 (réf. abrégée en OC4), p. 273-625.

＊右のテクストの日本語訳については、以下の既訳書を使用させていただいたが、文脈におうじて訳語を変更させていただいたところがある。

アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言／溶ける魚』巖谷國士訳、岩波文庫、一九九二年。

マルセル・プルースト『見出された時Ⅰ』（『失われた時を求めて十二』）鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇七年。

（1）La lettre d'André Breton à Louis Aragon, datée du 13 avril 1919; citée dans Louis Aragon «Lautréamont et nous», *Les Lettres françaises*, n. 1186, 1967, p. 7. C'est moi qui souligne.

（2）Entretien avec Roger Vitrac : « André Breton n'écrira plus », *Le Journal du peuple*, 7 avril 1923.

（3）André Breton, «Entrée des médiums» (1922), OC1, p. 275. アンドレ・ブルトン「霊媒の登場」『アンドレ・ブルトン集成6』巖谷國士ほか訳、人文書院、一九七四年、一三二－一三三頁。

（4）André Breton, *Le Surréalisme et la peinture*, *Œuvres complètes*, tome IV, Gallimard, 2008 (réf. abrégée en

OC4), p. 352. アンドレ・ブルトン『シュルレアリスムと絵画』粟津則雄ほか訳、人文書院、一九九七年、一八頁。

（5）Henri Bergson, *Matière et mémoire*, édition critique dirigée par Frédéric Worms, PUF, col. «Quadrige», 2010, p. 171-172. C'est moi qui souligne. アンリ・ベルクソン『物質と記憶』合田正人・松本力訳、ちくま学芸文庫、二〇〇七年、二二〇－二二一頁。強調引用者。

（6）一九二〇年代のブルトンにおいてもっとも重要なキーワードである「無関心」については、たとえば『シュルレアリスム宣言』や「現実僅少論序説」（一九二四）を参照のこと。「ぼくは忘れる、ぼくが語っているのは、もうすでに忘れてしまったこと。何からなにまで、ぜんぶ忘れてしまった、かつて起こったうれしいことも、かなしいことも一切合切。無関心だったこと以外はどれもこれも。無関心だけがすばらしい［……］。ぼくがじぶんの記憶（メモワール）に身につけさせようと必死に訓練したのは、まさに無関心。教訓なき寓話……」（「現実僅少論序説」）。「学びなおし」については、おなじく『シュルレアリスム宣言』や『ナジャ』の名高い冒頭部分を参照していただきたい。「事実、じぶんでは意味を忘れていた言葉をシュルレアリスム的に用いるといったことも私にはおこっている。それらの言葉の用いかたが、語彙の定義とぴったり合っていることを、私はあとになってから確認することができた。この点から見て、ひとは「学ぶ」のではなくて、もっぱら「学びなおす」にすぎないと考えられるだろう」（『シュルレアリスム宣言』）。

（7）Henri Bergson, *op. cit.*, p. 170. ベルクソン前掲書、二一九頁。

（8）湯沢英彦「「形式」の要請、人生の「記憶」――世紀転換期におけるプルースト美学の位置」、『思想』二〇一三年十一月（一〇七五号）、二二〇頁。

（9）André Breton, «Entretien avec Madeleine Chapsal» (1962), OC4, p. 1016.

（10）André Breton, *Nadja*, OC1, p. 650. アンドレ・ブルトン『ナジャ』巌谷國士訳、岩波文庫、一八－一九頁。よく知られているようにブルトンは、一九二〇年にポール・ヴァレリーの紹介をつうじて、そのころ『ゲルマントのほう』の脱稿を急いでいたプルーストに校正補助のバイトとして雇われることになるが、その直後、ときをおかずして、かれはプルーストにたいして当時かれらが出していた『文学』と題される雑誌に寄稿を依頼することになる。残念ながら、あまりにも無謀といわざるをえないこのリクエストは、やはり、当時多忙をきわめていたプルーストの関心を引くものではなかったようで、興味をそそるこのコラボレーションが実現することはなかった。ブルトンの方が「フラれた」かっこうになる。この辺のやりとりについては、一九二〇年十月二七日の日付がある、つぎのブルトン宛てのプルーストの手紙を参照のこと。La lettre de Marcel Proust à André Breton, datée du 27 octobre 1920 ; reprise dans Michel Sanouillet, *Dada à Paris*, Flammarion (réimpression), 1993, p. 609. この一九二〇年の雑誌への寄稿依頼から、すでに確認した一九六二年のインタヴューでの発言まで、ブルトンは生涯をつうじて、いわばブレることなく、プルーストにたいして熱いオマージュを捧げつづけたという事実をあらためて確認しておく必要があるだろう。

（11） André Breton, « Introduction au discours sur le peu de réalité » (1924), *Œuvres complètes*, tome II, Gallimard, 1992, p. 265. アンドレ・ブルトン「現実僅少論序説」、前掲『アンドレ・ブルトン集成6』二〇一頁。